

「世界遺産春日山原始林－照葉樹林とシカをめぐる生態と文化－」

"World Cultural Heritage 'Kasugayama Primeval Forest' : Ecology and culture of the lucidophyllus forest - sika deer relations" written and edited by Yuri Maesako

前迫ゆり（編著），ナカニシヤ出版，255pp＋口絵カラー20pp，定価2,625円（本体2,500円＋税）（2013）

2013年3月に刊行された本書は，4部から構成されるちょっと欲張りな本である。春日山という縦糸に，全く色の違う4本の横糸を織り込んだ構成となっている。

第Ⅰ部では，森と山をキーワードにして，多川俊映氏，中東弘氏，和田萃氏の3氏が春日山の文化的側面を解説してくれる。日本人の精神世界の中で，春日山をはじめとした山とはどのような位置づけだったのだろうか？その世界観は歴史的にどんな変容をとげてきたのだろうか？最近はやりの言葉をつかえば，山と森をパワースポットとして考える日本人の奥底を再認識させてくれる。

第Ⅱ部は，春日山原始林の自然誌である。春日山を歩くときに一緒に持っていきたい，カラー版自然ガイドブックといった感じである。前迫ゆり氏は植物を，伊藤ふくお氏はルーミスジミをはじめとする昆虫を，鳥居春己氏は春日山とその周辺で生息確認された哺乳動物を紹介してくれる。コラムでは松井正文氏がタゴガエルなどを紹介している。高田将志氏と山田誠氏は，春日山を歩いていて感じる，地形と溪流の様子の違いが，地質の違いに結びついていることをわかりやすく教えてくれる。

第Ⅲ部では，春日山とその周辺の植生の劣化が，生態的に解説されている。シカの過剰な個体数密度による採食圧の増加，それにとまっておこる植生劣化と外来種の侵入によって生じる多様性や森林構造の変化が，この部分の主題となっている。

春日山照葉樹林や周辺地域での調査研究の先駆者ともいえる菅沼孝之氏と渡辺弘之氏による二つ

の章は，春日山が現在直面する植生劣化の問題が，1970年代からすでにさまざまな形で問題になっていたことを示してくれる。森林管理には長期的な変動の実態を記録し，それをもとに将来を予測することが必要なのだが，残念ながら春日山には森林に関する長期的なモニタリングデータが欠如している。しかし，さまざまな断片的な森林調査データをもとにして，前迫ゆり氏は過去に起こった種類構成の変動を明らかにし，山倉拓夫氏は大胆な森林動態予測を行っている。明らかに，春日山の樹種多様性は減少し，その将来予測にも楽観的な要素は全く無い。

小船武司氏と河瀬浩氏は，1977年から2008年に毎年行われた簡易センサスデータを活用して，鳥類の長期的変動を明らかにしている。ミゾゴイとアカショウビンの当該地域からの消失（森林内の環境の乾燥化が原因）を報告している。

シカによる照葉樹林の劣化には，照葉樹林の構成種自体が食べられていくことと，不嗜好性の植物に置き換えられることの二つの過程が関与している。名波氏は国内外来種ナギの雌雄異株性と，高密度下における雄株の相対的に高い生存率が，他の樹種との共存を可能にしているという，とてもユニークな視点からの研究を紹介している。

鈴木亮氏と前迫ゆり氏による林床植物のシカに対する適応戦略の解説は，視点を草地にまで広げて，この本の中ではユニークである。公園平たん部の草地の植物は，いずれもシカの採食を回避するような戦略を獲得しているのに，森林林床の植物はシカによる被食を回避できていない。林床へ

のシカの採食圧の浸透は、ごく最近急速に広がったために、植物が集団遺伝的にあるいは進化的に対応するにはまだ時間が短すぎるという考え方は、この問題を考える上で示唆深い。

草加伸吾氏によるコラムでは、春日山原始林内を流れる小河川での水質変化が報告されている。春日山から流れ出る小河川の水質が30年の間に変化して、森林を皆伐した時と同じ程度の硝酸濃度が大雨時に記録されるようになってしまった。植生劣化によって余剰な土壤養分が水とともに流れ出している可能性を示唆していて、植生劣化がドミノ的に引き起こす現象の一端を教えてくれる。

第IV部では、春日山の森林とシカの保全管理についての考察と提言が扱われている。立澤史郎氏は、ここでシカと植生の双方がじり貧状態にあるという構図を描き出している。人間の給餌活動などがシカの過剰な個体数密度と貧栄養状態をつくりだすとともに、植生への過度の採食圧をつくりだす。そして植生のほうは、シカの選択的な採食圧によって多様性や健全な個体群構造を維持できなくなっていく。こうして劣化した植物資源はシカをさらに追いつめ、追いつめられたシカは不嗜好植物にまで口にするようになり、植生のさらなる劣化を招く。化学防衛された植物をも餌資源にすることで、シカはさらに消耗していく。この悪循環を断ち切る統合的管理、シカと植生双方が立ちなおる道を探ることが重要だという主張には説得力がある。広大なシカ柵設置も、シカを完全に柵内から排除するのは難しく、逆に、山側に閉じ込められたシカはさらに森林の現状を悪化させ、平坦な公園部に閉じ込められたシカは資源の多様性を失い、さらに追い詰められてしまうかもしれないとも指摘している。

鳥居春己氏は、シカに関する知見を整理し、神鹿としてのイメージを壊すことになったとしても、

春日山の森とシカの双方を生かしていくには現状のままのシカの管理方法ではなく、直接的な個体数管理にも踏み込むべきだと主張している。

前迫ゆり氏は、シカと照葉樹林の保全に関するポイントを整理し、適応的管理の必要性和緊急性を強調している。研究者の間ではシカと森林に対する積極的な管理の必要性はコンセンサスとして定着しているが、なにか対策を実行に移していくには、市民の認識が十分ではなく、合意形成の場そのものの設定が難しい。そのため、行政も積極的に動くモチベーションを持ちえていないように見える。とはいえ、このようなシカによる植生劣化の問題に対する認識は、市民の間にも徐々にひろがりつつある。本書の3つ目のコラムは、登山を通じてシカの問題にコミットするようになった、由良行基周氏と高橋円氏による寄稿である。

前迫氏は、この本自体を、特に第II部とIII部を、一般の人々をこの議論に誘い込むための読み物として企画している。この2つのパートに、第I部の文化的側面とIV部の保全をめぐる考察と提言を加えたために、統一観に欠けたものになってしまったのが残念である。しかし、前迫氏の意欲的な構成意図は高く評価したいし、事態の緊急性を考えれば、このような無理は通すべきものかもしれない。体裁的には、縦書きの本文と横書きの参考文献とが遠く離れてしまい、はなはだ読みにくいものになってしまっているのがもったいない。さらに、縦書きで数字を記載するために、小数点と桁区切点が混乱して、誤植を誘発している。本書は絶対に横書きにすべきであったと思う。また、カラスザンショウをシカの不嗜好植物とする記載が何か所かあるが、パイオニア樹種で窒素分の多いカラスザンショウの葉は、刺があってもシカの大好きな植物のひとつであること（少なくとも春日山では）を指摘しておきたい。（神崎 護）